

令和 4 年度 学校教育自己診断分析

校長 田 尻 肇

生徒対象教育自己診断

- ・ 2 項目を除き昨年度から肯定率が増加した。行事、国際交流、地域連携はコロナの関係で昨年度、一昨年度の 2 年間設問から除外していたが、今年度 3 年ぶりに復活した。その他の 26 項目については、ここ 2 年間で順調に肯定率が上がり、肯定率の平均は令和 2 年度が 75.3%、令和 3 年度 79.3%、今年度が 82.9% となった。肯定率が 8 割を超えたことは嬉しい結果であり、先生方の努力や研鑽の結果であると考えます。
- ・ 授業に関する項目が大幅に向上した。授業がわかり易い (82.6%) < (R3 74.9% R2 60.5%) > は初めて 8 割を超え、授業は学力向上に役立っている (81.2%) < (R3 81.2% R2 72.1%) > と実感する生徒が増加した。
- ・ 先生方の「主体的、協働的で深い学び」に向けた授業改善の努力が生徒に伝わり、教え方に工夫をしている先生が多い (73.8%) < (R3 73.8% R2 61.5%) >、授業では自分の考えをまとめたり、発表する機会がある (87.6%) < (R3 78.5% R2 72.7%) > と大幅に肯定率がアップした。教員の研鑽が生徒に伝わり生徒の満足度がさらに教員のモチベーションを高めると言った相乗効果が、授業の質の向上に繋がる。進路実現に必要な学力はもとより、変化し続ける社会を生き抜くために生徒がつけなければならない力をしっかりと定め、今後も「何を学ぶか」という観点に、「どう学ぶか」ということも加味しながら、組織的な授業力を高めていくことが大切である。そのためには、授業力向上に前向きな教職員集団の構築が大切である。特に ICT 機器の活用は、ベテランの先生方にとってハードルが高い。よって、先生方個人の努力だけに頼るのではなく、首席やスキルの高い教員を軸としながら、できることから無理なく進めていく必要がある。今後も、自主的、主体的な研修を通し、中長期的なビジョンのもとスモールステップで推進していきたい。
- ・ 「先生は協力して生徒指導にあたっている」 (87.4%) < (R3 82.6% R2 76.2%) >、「生活規律や学習規律などの基本的習慣の確立に力を入れている」 (80.1%) < (R3 78.1% R2 72.3%) > と、生徒指導に関する肯定率は 3 年連続で向上した。日頃から、先生方が一枚岩となりながら丁寧に指導をしている姿、そして生徒の成長を願う思いが生徒にも伝わっていることが伺える。コロナ渦において、厳しい家庭環境に置かれている生徒や友人関係が上手く構築できず精神的に不安定な生徒が多い状況の中、今後も担任団を中心に家庭と連携を取りながら、組織的な生徒指導を推進していきたい。
- ・ 「将来の進路や生き方について考える機会がある」 (93.5%) < (R3 92.5% R2 85.3%) > は 2 年連続で極めて高い肯定率を示した。HR や探究の時間を活用したキャリア教育の成果と言える。
- ・ 「人権について学ぶ機会がある」 (87.4%) < (R3 85.6% R2 85.2%) > も高い肯定率を維持することができた。生徒全てが、安全で安心した学校生活を送ることができる学校であるためには、「自己肯定・他者理解」両面からの人権教育は必要不可欠である。「部落差別問題」などの不易の課題から、「性的マイノリティー」などといった日々情報がリニューアルされるような課題まで、多岐にわたる人権教育をおこなっていくことは高校教育の根幹のひとつである。

- ・本校における人権教育の充実、ならびに教職員集団の人権感覚（カウンセリングマインド）の向上が、「担任の先生以外に相談できる先生がいる」（62.3%）＜（R3 59.0% R2 54.7%）＞、「学校では挨拶が自然に交わされている」（80.6%）＜（R3 79.0% R2 78.5%）＞、「先生は、いじめや相談事について私たちが困っていることがあれば真剣に対応してくれる」（85.6%）＜（R3 85.3% R2 79.1%）＞といった肯定率向上に繋がっていると言える。
- ・肯定率が下がった２項目は「自分部活動に積極的に取り組んでいる」（79.7% ➡ 76.5%）と「校舎や体育施設は、授業や活動がしやすいように整備されている」（72.0% ➡ 68.2%）であった。
部活動については、コロナの影響が大きいと考えられる。制限の多い中で、ダンス部や軽音楽部、書道部、ラグビー部（選抜）が全国大会に出場するなど、生徒は良く頑張っている。引き続き、with コロナにおける活動が続くが、何とか生徒たちの活動が充実するよう生徒指導部（自治会担当）が中心となり、生徒の活動をサポートしてあげなければならない。
- ・もう一つの項目である施設面の老朽化は本校独自の努力では如何ともしがたい部分がある。特にトイレの老朽化については、多くの生徒が自由記述においても不満を表している。引き続き、教育庁にこの状況を伝えながら、生徒・教職員が快適に過ごせる環境づくりを進めていく必要がある。

<今後の課題として>

- ・「担任の先生以外に相談できる先生がいる」（62.3%）＜（R3 59.0% R2 54.7%）＞は、昨年度から3.3ポイント回復し、6割に到達したものの、まだまだ物足りない値である。生徒の多様化が進む中、生徒相談体制の充実は大きな課題である。引き続き、担任団、教育相談委員会を軸に、さらなる充実が必要である。

保護者対象教育自己診断

- ・20項目中15項目の肯定率がアップした。また、全設問の肯定率の平均も82.9%（R3 80.2% R2 74.8%）に向上した。
- ・「桜塚高校には他の学校にない良さ（特色）がある」（79.8%）＜R3 76.0% R2 61.2% R1 50.6%＞はここ3年間順調に増加している。3年間で20%近く向上したことは、教職員の元気に繋がる結果であり、日頃の教員の研鑽が生徒を通じて保護者に伝わったものと思われる。
- ・「桜塚高校は、将来の進路や職業について適切な指導を行っている」（85.0%）＜R3 83.7% R2 78.4%＞
「桜塚高校は、進路に関する情報提供に努力している」（84.3%）＜R3 79.1% R2 72.5%＞と進路指導に関する肯定率は順調に向上している。オンラインも含めた説明会を丁寧に行っていることの成果と言える。
- ・「桜塚高校では、生徒に対するプライバシーや人権が守られている」（95.4%）＜R3 95.2% R2 91.3%＞は、引き続き高い肯定率となった。教育現場における基盤であるため、今後も組織的に徹底する必要がある。
- ・「桜塚高校が保護者に出す文書・事務連絡等は適切である」（92.1%）、「桜塚高校によるメール発信は役に立っている」（97.0%）という高い満足度は、本校からの情報発信が有効であり、保護者連携の大切なツールとなっていることの表れである。今後も、保護者連絡用ライデン一斉メール配信システムに加えて、Google Classroomを活用し、さらに保護者との繋がりを強化するとともに、ペーパーレス化も推進していきたい。

- ・「桜塚高校はいじめや相談事について子どもが困っているときことがあれば真剣に対応してくれる」(84.2%) <R3 81.3% R2 76.6%>の肯定率が順調に向上している。教員による生徒への寄り添いが保護者に伝わっている。社会に変化とともに生徒の多様化が進む中、またコロナ渦により不安定な生徒が増える中、引き続き、生徒が安心安全に通える学校づくりをめざしていきたい。

<今後の課題として>

- ・最も低かったのは「桜塚高校の施設・設備は学習環境の面で満足できる」(59.4%) <R3 56.5% R2 55.6%>の肯定率であった。特に自由記述ではトイレの改装について要望が多く見られた。

教職員対象教育自己診断

母数が少ないため有意差が何ポイントであるかという判断は難しいが、昨年度比 5%以上増加・減少した項目および2年間で大きく変化した項目に着目し総括することとする。

- ・「学校の教育活動について教職員で日常的に話し合っている」(84.9%) <(R3 91.3% R2 89.6%)>が、昨年度から6.4ポイント下がった。高い値ではあるものの振り返る必要がある。教育改革が進む中において学校組織力を向上させていくためには、教員相互のコミュニケーションはとても大切である。今後も、馴れ合いではない協働性のある教職員集団の構築に向けて、首席やコアとなる教員を中心に教員集団の主体性を高めていかなければならない。
- ・「教職員は生徒の意見をよく聞いている」(98.1%) <R3 86.9% R2 80.9%>が大きく向上した。コロナ渦において、教職員が生徒にしっかりと寄り添っていることの表れであると言える。一方、「生徒自治会活動を通じて、生徒が民主的な手続きを経て、主体的に活動できるよう学校全体で支援している」(75.0%) <R3 82.6% R2 75.0%>が下がったのは、コロナ渦においてなかなか生徒が希望するような行事ができていないことが影響しているのではないだろうか。
- ・「清掃が行き届いている」(75.5%) <R3 87.0% R2 79.2%>が大きく下がった。校内の美化状況は学習にも影響するため、生徒側の問題なのか教員側の体制なのかをしっかりと総括する必要がある。
- ・「コンピュータ等 ICT 機器が授業などで活用されている」(100%) <R3 97.7% R2 91.7%>はついに100%となった。1人1台の端末を活用した教育活動において、府のパイロット校というスタンスで先進的な授業改革をおこなっていることは、現在、本校教育の大きな特色となっている。今後、活用方法のブラッシュアップをおこない、さらなる授業力の向上に繋げたい。
- ・「アクティブラーニング型の学習指導を取り入れている」(86.7%) <R3 69.6% R2 63.8%>が大幅に向上した。新学習指導要領の趣旨でもある、主体的・協働的な学びに向けて先生方が工夫をしていることを示している。この努力は生徒にも伝わっており学習に関するアンケートの肯定率が軒並み向上している。
- ・「生徒の問題行動が起きた時、組織的に対応する体制が整っている」(76.9%) <R3 95.6% R2 89.3%>が大きく下がった。問題発生時には担任団と生徒指導部が中心となるが、連携に課題があるのかも知れない。改めてしっかりと整理をし、組織的な対応力を高める必要がある。
- ・「いじめが起こった際の体制が整っており、迅速に対応することができている」(98.1%) <R3 97.9% R2 95.8%>の肯定率は引き続き極めて高い肯定率である。これは、教職員のカウンセリングマインドの向上はもとより、組織的対応が進んでいることを表している。「いじめ対応委員会」も、いじめの早期対応に機能を果たしていると言える。

- ・「本校の校内研修は、質・量ともに充実している」(75.0%) <R3 87.0% R2 70.9%>は、昨年度から下がったが、昨年度の肯定率が極めて高かったことによるためであり、今年度の値は決して低い値ではないと考える。今後も「効果(満足感) > 負担」が実感できる研修に向け、内容を精選しながら「為になり、今後に生かすことのできる研修」や「自発的な研修」を進めていくことが大切である。
- ・「教員間で授業見学し、授業方法について検討する機会を積極的に持っている」(92.3%) <R3 90.9% R2 84.8%>が向上しているのは、公開授業週間をきっかけとした相互授業見学が進んでいることの表れである。
- ・「桜塚高校では生徒同士や教職員相互、生徒と教職員間で挨拶が自然に交わされている。また、外来者に対してもきちんと挨拶ができています。」(82.7%) <R3 80.4% R2 73.0%>が2年連続で向上したことは、学校組織に流れる空気が良くなったことの証といえる。教員相互の信頼関係、教員と生徒の信頼関係、生徒同士の信頼関係が挨拶の根幹である。教員同士、そして教員から生徒に対し心のこもった挨拶が自然に交わされ、温かい空気が溢れる学校こそが、「生徒の心が育つ」学校であると言える。

<今後の課題として>

- ・学校が抱える課題の複雑多様化や新陳代謝が進む中、「**オール学校**」での**課題解決や改革**をおこなっていく必要がある。今後も、**教科や分掌を横断した組織力アップ**に向け、首席が軸となりながら、**風通しの良い職場環境**を整えていくことが大切である。また、教育改革の進む中において ICT の活用や新観点別評価の導入など教員の負担は大きい。特にベテランの先生方にとって、長年の経験を変えていくことは大きな労力である。信頼関係で繋がり、チームワーク溢れる教職員集団が相互に助け合う環境づくりが大切であるとともに、システムとしての働き方改革を進めていかななくてはならない。